令和六年度　垣生中俳句会（十月）入賞作品

金賞　応援歌かかげた拳（こぶし）天高し

中学校での最後の運動会。ブロックの全員が力の限りに声を張り、「応援歌」を歌い上げました。その瞬間を切り取った一句。作者は、緑凰副ブロック長です。リーダーたちが中心となり、夏休みから試行錯誤しながら創った応援です。練習にも一層熱が入ったことでしょう。高く澄んだ秋空へと一斉に「かかげた拳」から、ブロックの団結力、勝利を目指す強い思いや達成感が伝わってきます。仲間との絆で最高に輝けた応援となりましたね。

銀賞　じいちゃんの新米まだかと待ちわびる

毎年楽しみにしている「じいちゃんの新米」を、いつ食べられるのかと心待ちにしている様子が素直に詠まれています。新米の豊かな香りと味は食欲をそそりますね。まして祖父が育てた新米とあれば、味は格別でしょう。リズム感を出す「い」音の続きと「待ちわびる」の言葉選びが効果的で心情をよく伝えています。新米が届いた時の作者の喜び、それを嬉しく思う祖父の姿、新米を囲む食卓の様子など、その後の情景までをも思わせる心温まる一句です。

銀賞　秋風や羽織一枚寸足らず

中学生になり、身体の成長を実感する人は多いでしょう。その成長を、羽織った衣類の大きさと比較し「寸足らず」と表現したところが巧みです。上五に「や」の切れ字を置くことで、音律が美しく、秋の風情を感じる一句になりました。季語の「秋風」は三秋に分かれ、少し残暑をともなう初秋の風、爽やかな中秋の風、冷気をともなう晩秋の風を表します。ここでは、「羽織一枚」と表現されていることから、肌寒さが出始めた中秋の頃と詠むことができます。具体的な言葉により、情景がさらに鮮明になりますね。

銅賞　名月や雲間に覗く光の輪

「名月」と言えば、秋の澄み切った夜空に煌々と輝く満月を思い起こさせます。今年の中秋の名月の日は、曇り空でした。その日の句でしょうか。薄雲に反射してできる月光の輪が、姿は見えない名月の存在をより強く感じさせます。「や」の切れも功を奏しています。美しく輝く名月を想う余韻が残り、静かで幻想的な秋夜の情景が伝わってきます。作者の細やかな自然美への視点が魅力的です。

銅賞　勇ましき舁夫（かきふ）の熱気秋祭り

活気に溢れる「秋祭り」の力強い一句です。垣生の里にも「勇ましき」声が響き渡った地方祭。松山で「喧嘩御輿」とも呼ばれる祭りの荒々しさは、垣生地域でもしかり。宮入では、御輿を激しく押し合い、御輿は何度も地面に叩き落とされ迫力があります。祭りの活発な雰囲気を、「舁夫の熱気」と表現した点に工夫が見られます。御輿をかつぐ人々の意気や観衆の高揚感までもが強く伝わり、臨場感のある句となりました。

銅賞　かくれんぼ顔出したがる月見かな

月が雲間から見え隠れするさまを「かくれんぼ」と重ねた一句かと思います。「顔だしたがる」の擬人表現が巧妙で、「かくれんぼ」なのに、自ら何度も姿を見せようとする月と月を見つけて歓喜する作者との楽しげで微笑ましい雰囲気が伝わってきます。ただ、「月見」は人の動作ゆえに、「かくれんぼ」をしている主体が人であると詠むこともできます。主体が月であるならば、「望（もち）の月」「月今宵」「月の雲」などの季語を用いてみてはどうでしょうか。教室にある「歳時記」も活用してみてくださいね。

入選

蟷螂やするどいカマ振り虫を捕る
栗ごはん出来たてかおる母の味
祖父と見た風力発電秋の風
三日後の祖母の退院知る夜長
澄み切った金木犀の香る道
梨食すシャキッと音鳴りもう一口
グラウンド蜻蛉の羽音と響く声
羽広げ不規則に飛ぶ赤蜻蛉
空色の変化観察秋の暮
見に来たよ応援合戦アキアカネ
月明かり照らされかこむ芋煮会
登校中となりで歩く赤とんぼ
金木犀窓開け香る勉強中
方程式頭悩ます秋時雨
受験生「万里一空」星月夜
無花果と祖父の思い出語り継ぐ